

八幡浜市内におけるいなほ農園の地縁型ビジネス (高齢者雇用の創出を目指して)

公益財団法人 えひめ地域政策研究センター 研究員 渡部 卓

1. はじめに

少子高齢化社会、人口減少社会において、移住者の増加や若者の雇用創出は自治体やその地域における待ったなしの課題となっている。加えて高齢者福祉を中心とした社会保障の面も課題山積であるのは言うまでもない。公的介護保険制度や後期高齢者医療保険制度の相次ぐ導入により、毎月の公的年金から保険料が天引き徴収されるなど特に高齢者の収入は減少傾向にあり、今後「適正化」のもとに社会保障の見直しが進むことにより、高齢者を取り巻く環境は一層変化するものと思われる。今回取り上げる愛媛県八幡浜市の株式会社三瀬商店（本社：愛媛県八幡浜市、業種：燃料小売、移動通信機器販売）が展開する「いなほ農園」は、地域の高齢者の雇用を創出することにより、所得の向上といきいきと暮らせる住みよい地域社会をつくりたいという強い思いが契機でスタートした養鶏事業である。本稿では、八幡浜市の産業の歴史・地元食品加工業者との結びつきに代表される地縁型ビジネスの一端を紹介することにより、他の地域での産業創出や雇用創出の参考になれば幸いである。



三瀬 泰介氏

2. 高齢者雇用と耕作放棄地

いなほ農園を語るうえで欠かせないのが、高齢者雇用

と耕作放棄地の鶏舎利用である。ここでは、高齢者の公的年金収入の現状から見た高齢者雇用の重要性と、八幡浜市における産業歴史上の耕作放棄地の位置付けを整理したい。

(ア) 公的年金額と高齢者の収入

まず、高齢者の経済状況は「高齢者世帯^{*1}は、(中略)約7割の世帯は公的年金・恩給の総所得に占める割合が80%以上」^{*2}であるとされ、公的年金は高齢者の主な収入源となっていることが伺える。また、老齢給付における厚生年金と国民年金受給者の平均年金月額^{*3}は厚生年金が147,339円、国民年金が54,249円と過去の働き方によって約3倍もの所得格差があることも伺える。

(イ) 八幡浜市の産業の歴史^{*4}

八幡浜市は愛媛県の西端、九州に向かって伸びる佐田岬半島の南側の付け根に位置する。地形としては、東南北の三方が標高300～800mという山地の稜線に囲まれ、西方が宇和海に開けている。南予特有の急傾斜段畑地帯を形成しており、そこで栽培される柑橘類、特に温州みかんは「八幡浜ブランド」として全国に広く認知されている。水産業においても戦後トロール漁の基地として全国にその名を知られ、豊富で新鮮な魚を原料とするかまぼこやじゃこてんに代表される水産加工品の製造が盛んである。商業では、古くは江戸時代から長崎貿易を行い、明治・大正期には呉服・太物・木綿類を主とした大卸問屋が集積していた。取引先は宇和島を超えて岩松、御荘、高知県宿毛に及び、西は大分、佐賀の関、佐伯、延岡にまで至っており、「伊予の大阪」の異名を持つなど、当時は農業・漁業・商業のまちであったことが伺える。

特に八幡浜市産のみかんは、昭和36年の農業基本法の制定により、真穴地区に代表されるように一躍その規模の拡大と生産性の向上につながる発展期を迎えた。昭和44年度から工事着工となった県営八代パイロット事業は、山林92.5haを近代的なみかん団地として造成し、経営規模の拡大と自立安定農家の育成を図ることを目的に行われた。急峻な地形による日当たりや水はけのよさもあり質の良いみかんができると評判である。一方で、当時から従事していたみかん農家は現在年齢が80歳代を迎えており、後継者不足や体力的な衰えもあり、耕作放棄地が増加傾向である。近年はイノシシやたぬきによる農作物への被害も報告されており、みかん農家の意欲を削ぐなど八代パイロット全体の懸案事項となっている。

3. 媛っこ地鶏について

媛っこ地鶏^{*5}とは、愛媛県養鶏研究所で平成14年に開発されたもので、開発の歴史は昭和63年に高品質肉用鶏伊予路しゃもの開発から始まる。伊予路しゃものは良い肉質とされながらも、長期間の飼育や小さな出荷体重、飼料要求率が悪いことからそれに見合う販売価格が適わず、あまり普及しなかった。そこで伊予路しゃもの肉質の保持を計りながら問題点を克服することを目的に開発

されたのが媛っこ地鶏である。このようにして消費者・流通業者・生産者のニーズに合致した地鶏ができあがり平成15年4月に一般公募により「媛っこ地鶏」と命名された。

平成15年5月には媛っこ地鶏振興協議会が設立し、飼育基準を定め、品質の維持に努めている。これによりブロイラーとの差別化を図ると共に生産者の水平的連携を構築し、媛っこ地鶏のブランド力向上に成功している。品種改良により、生産者ニーズにも配慮した種とはなっているものの、この飼育基準（図）では特に飼育期間、飼育方法及び飼育密度がブロイラー飼育とは違う点において、鶏舎はより広く、飼育期間はより長くなるので、イニシャルコスト（鶏舎導入）、ランニングコスト（飼料代、人件費）が大きくなる傾向にある。



鶏舎内の様子

媛っこ地鶏の飼育基準

元雛 (もとびな)	元雛は、愛媛県養鶏研究所が供給した媛っこ地鶏の雛であること。
飼育期間	孵化日から80日以上150日までを飼育期間とすること。
飼育方法	生後28日齢以降、平飼いで飼育していること。
飼育密度	生後28日齢以降、1平方メートルあたり10羽以下で飼育していること。
適正な飼育管理	愛媛県養鶏研究所が定めるワクチンプログラムなどにより、適正に管理すること。
生産管理台帳等	飼育期間中の生産管理台帳、出荷履歴台帳、飼料購入台帳を記帳・保管すること。
根拠法令	農林水産省「飼料の安全性の確保及び品質の改善に関する法律」 家畜伝染病予防法に基づく「飼養衛生管理基準に係る指導指針」 衛生管理のための「家畜の生産段階における衛生ガイドライン」

4. 地域課題と地縁

媛っこ地鶏の評判を聞きつけた三瀬氏は、養鶏業参入を模索することとなる。ここでは「機動力のある雇用」「広大な場所」「安価で高品質な飼料」を得るために、八幡浜の地域課題の克服と八幡浜ならではの地縁を活かした取組みをご紹介します。

(ア)「機動力のある雇用」

三瀬氏はまず高齢者雇用の場として媛っこ地鶏の生産、加工販売を考えた。鶏舎の管理には農業経験者のノウハウを活かすことができるし、加工場では熟練主婦のノウハウを活かすことができる。フルタイムで雇用するのではなく、事業の繁閑に合わせた雇用形態とし、定職を持っていないので昼間でも労働力として投入することが可能だ。求める能力と機動力を持ち合わせており、効率的で集中的に雇用することで人件費は1人当たり5万円/月を想定した。

現在加工場で7名、鶏舎で5名雇用している。最高齢は74歳。

実際に加工場にお邪魔する機会があり、働いてらっしゃる皆さんは私たちの問い掛けにも気さくに答えていただき、その誇らしげな表情がとても印象的だった。三瀬氏も加工場で働く主婦たちを「がいな^{*6}シェフ」ならぬ「がいなシェフ（主婦）」と称し商店街イベントのやきとりブースの出店の際には「がいなシェフ」と記されたお揃いのエプロンで笑顔を振りまいている。

一方、山の上にある鶏舎では男性陣が小型ショベ



「がいな主婦」の手作業の様子

ルカーや草刈り機を操り、草刈りや鶏舎の掃除などを手際よくされていた。ここでは農業経験者が主に雇用されており、鶏舎の作業において農業経験者はその持っている能力を活かすことができる。またその能力は汎用性が高く、様々な仕事に対応できるとのこと。体も丈夫で屋外の作業に慣れていることも能力の一つだという。加えて、鶏舎には信頼できる元三瓶町長の井伊氏がいなほ農園の園長として関わっている。井伊氏は家業の都合もあり、建築土木1級、建築士2級の資格を持ち、鶏舎の建屋などの営繕を担当している。開業当初から三瀬氏と井伊氏は八幡浜や南予の衰退を憂い協力してきた。いなほ農園のブレインでありキーマンと言える。

(イ)「広大な場所」

媛っこ地鶏は平飼い（鶏が自由に地面を歩き回ることができる飼い方）と1㎡あたり10羽までという飼育基準が設けられている。これにより、ストレスのかからない飼育が可能で、良い肉質になるという。この飼育基準を満たす広大な土地を八代パイロットの耕作放棄地を鶏舎にすることで解決した。八幡浜市は平地が少なく広大な土地は山肌の農地ぐらいしかない。耕作放棄地を購入すれば土地の購入費用も抑えられるし、再利用に繋がれば人の手入れが行き届くのでいのししやたぬきの住みかにならなくなる。まさに一石二鳥である。タイミング良く県外在住の持ち主から山頂付近の風通しの良いところ約0.5haの購入依頼があった。この土地はみかん農家の父親からの相続で取得したようで、持ち主としても手入れもできず周辺農家に迷惑を掛けたくないと思っていたこともあり、相場通りの価格で購入することができた。現在は隣の約0.5haも耕作放棄となったところを賃貸で利用しており、合計約1haの耕作放棄地の有効利用に至っている。

(ウ)「安価で高品質な飼料」

いなほ農園では飼育期間を120日と設定し、じっくり大きく育てることとした。それだけではない、安心・安全という付加価値を付けるために飼料も八幡浜産や顔の見える付き合いにこだわった結果、

他との差別化に成功している。

特筆すべきは、地元水産加工会社から提供されるB級品のちりめんじゃこを飼料米に混ぜて与えていることと、地元菓子メーカーから提供されるカステラの切れ端を食欲減退時に与えていることだ。ちりめんじゃこのB級品といっても頭が切れているので売り物にならない程度のもので人間が食べても問題ないものだ。夏の暑い日などは人間と同じく食欲が減退するらしく、そんな時でもカステラの切れ端は良く食べるそうだ。付け加えて、両者とも以前は、産業廃棄物としてお金を払って処理をしていたので、いなほ農園に無料で提供したとしても、経費節減に役立つとあって良好なパートナー関係となっている。また、野菜の卸問屋からも、売り物にならない葉物の切れ端などがその日の朝届くようになっており、新鮮な野菜を飼料米と併せて与えることもある。

これらの地縁とも言える結びつきは、高齢者雇用をまず第一にという事業コンセプトそのものに対する三瀬氏の姿勢に共感したこともそうだが、本業の株式会社三瀬商店の社長としての地域との結びつきや人柄がこのような良好な関係をつくっているものと推察する。

5. いなほ農園の6次産業

「花は声なくして、蝶を呼ぶ」これは、三瀬氏が経営理念として大事にしている言葉であるが、この意味は、「花は声を出さずとも、蜜を出し、蝶を引き寄せる」ということであり、三瀬氏の先輩である地元菓子メーカー会長からいただいた言葉だそうである。日々の作業を真面目に積み重ね努力してこそ、皆様に喜んでいただける品質の良い品をお届けできるという意味で、食品を扱う業種に初挑戦する三瀬氏にとってバイブルとなっているだけでなく、いなほ農園の基本理念としてスタッフ全員に浸透しているようだ。

品種、飼育環境、飼料の独自性を兼ね備えた媛っこ地鶏の品質に自信を持っていた三瀬氏は、媛っこ地鶏を一般消費者や飲食店経営者の方々に「価格は高くても食べたい」と思ってもらうには、実際に食べてもらう他ないと判断した。いくら「美味しいですよ!」と宣伝やア

ピールをしたところで、違いをわかってもらうには食べていただくしかないのであると三瀬氏は力を込める。そこで、加工することによって手軽に口にする機会を増やすことに注力し、鶏めしのおにぎりはじめ、やきとり、つくね、チキンカレーなどを開発。鮮度を保つために急速冷凍装置を導入しているが、後は必要最低限の設備と「がいな主婦」たちの手作業で加工を行っている。「機械化では美味しいものはできない。人間の手で行うほうが美味しいものができる。」と三瀬氏は言う。それに、この人間の手を加えることが高齢者雇用にもつながっているのだ。鶏めしのおにぎりは189円/1個、やきとりは200円/1本で地域の商店街イベントで出店したり、完全受注制で販売する。伺った日は地元の福祉施設の誕生日会用の受注に追われていた。コンビニのおにぎりや大衆居酒屋のやきとりに比べて高価ではあるものの商店街イベントでは毎回売り切れになるなど、媛っこ地鶏の認知度は飛躍的にアップした。

販路開拓においても実際に飲食店に持ち込むなど、地道な活動を続けている。愛媛信用金庫（本社：愛媛県松山市）が催した商談会でも、実際にその場で焼いたものを食べていただき商談成立に至ったそうだ。東京から訪れたシェフは生肉を食べるだけでその良さが分かるという。三瀬氏も「花は声なくして、蝶を呼ぶ」を基本理念とするいなほ農園の経営に手応えを感じたそうだ。

6. いなほ農園の取組みと地域づくりの共通点

地域課題への住民レベルでの取組みは、県内の地域づくり活動の事例からも多く見受けられる。今回ご紹介したいいなほ農園の取組みも地域課題解決の方策のひとつであり、以下（ア）～（オ）において分析したい。

（ア）全国共通の課題

年齢による家督能力の消失に伴う収入減を、公的年金だけで補うことができない状況があり、高齢者福祉の面から捉えた高齢者雇用の一層の拡充が求められている。

（イ）地域特有の課題

みかん農家の高齢化や担い手不足が進んでいる。それに伴う耕作放棄地の増加や鳥獣被害も報告されている。

(ウ) 課題克服のための手法

愛媛県養鶏研究所が開発した全国的にも珍しい4元交配種で、えひめ愛フード推進機構認定の種を養鶏し、6次産業（生産・加工・販売）を行なう。

(エ) 地域の強みを活かす

八幡浜を代表するちりめんじゃこや地元菓子メーカーのカステラの切れ端など、食品加工過程における食品残さを飼料として与えることで、独自性を生み他との差別化を図るだけでなく、食品残さを産業廃棄物として処理する費用の削減につながり良好な関係を築いている。

6次産業による雇用を創出し、農業経験者や主婦のノウハウを活かす場の提供を行うとともに、高齢者雇用に寄与している。昼間でも雇用することが可能であるなど機動力も持ち合わせており、繁閑に合わせた雇用が可能となっている。

八代パイロットの耕作放棄地を鶏舎にすることで、鳥獣被害の減少に寄与している。また、八幡浜市の産業構造上今後ますます耕作放棄地が増加することが想定されるが、本取組みは有効な対策としてモデルケースとなる可能性がある。今後みかん農家や農地所有者にとっても参考となる取組みではないだろうか。

(オ) 地縁の強みを活かす

本件のような取組みを行うにあたっては、以上のような強みや弱みを単に繋ぎ合わせるだけではひとつの形にはならない。発案する中心となる人物、良き参謀や協力者と考えを共有し、活動し続けることが重要である。本件においても鶏舎の完成までに土地取得から1年間を費やしている。このようなチームを作り上げることは出会いや縁を大切にする人柄があってこそだと思われる。我々の取材時の丁寧な対応からも垣間見ることができた。地域づくりは人づくりからというのは良く言われることだが、今回の取材を通じて痛感させられた。

以上のように、「高齢者の労働力」「耕作放棄地」「食品残さ」という3つの未利用資源を活用し、高齢者の出番をつくり豊かな老後を構築することや耕作放棄地の有効利用を行った取組みである。しかも、未利用資源の循

環が八幡浜市内で完結していることは、地域の強みを活かし差別化を図ることやコンパクトメリットを活かし効率化に繋がっている点においても素晴らしいことである。地域の強みを活かす点など地域づくり活動においても共通の着目点であり、この地縁とも言うべき同じ地域内の繋がりがあってこそ構築されたものである。逆に利害関係や過去からの人付き合いの悪い面が影響し、同じ地域であるが故に協力できないというケースもあると思われる。これを乗り越えるにはやはり未来志向で「この地域をこういうふうにしたい!」という思いを共有することから始まるのではないのだろうか。また、これらのファクターを繋ぎ合わせる中心的役割やアイデアを出すことのできる人材があつてこそ構築されたということも見逃すことはできない。

7. 今後の展開

6次産業の新たな取組みとして、八幡浜市内に飲食スペースを兼ねた新加工場を建設する計画がある。これにより販売力強化に繋げ、ますます地域雇用に貢献したい考えだ。この建設資金には株式会社愛媛銀行（本社：愛媛県松山市）が農林漁業成長産業化支援機構と構成する「えひめガイヤ成長産業化支援ファンド」と株式会社三瀬商店が共同出資する事業である。高齢者雇用の推進や耕作放棄地の利用が評価された。今後のいなほ農園の取組みに注目するとともに、同様な取組みが広がることを期待している。

*1 65歳以上の者のみで構成するか、又はこれに18歳未満の未婚の者が加わった世帯をいう。平成26年版高齢社会白書（概要版）より

*2 平成26年版高齢社会白書（概要版）より

*3 平均年金月額にはそれぞれ基礎年金額を含む。厚生年金・国民年金事業月報（速報）2014年4月より

*4 八幡浜市誌より部分抜粋

*5 愛媛のいいところ鶏（<http://www.aifood.jp/jidori/index.html>）より部分抜粋

*6 「がいな」とは「すごい」という意味の愛媛の方言。